



2022年度

愛宕山古墳 発掘調査の成果

2023年3月31日

大阪大学考古学研究室

調査の概要

古墳名：愛宕山古墳（下石野5号墳）

調査主体：大阪大学考古学研究室

（協力・三木市教育委員会・市史編さん室）

調査期間：2023年2月27日～3月19日

はじめに

大阪大学考古学研究室ではこの度、兵庫県三木市教育委員会・市史編さん室の協力のもと、同市別所町下石野所在の愛宕山古墳の発掘調査を実施しました。愛宕山古墳は、美囊川と加古川とが交わる、交通の要衝に築かれた長さ約90mの前方後円墳です（図1）。愛宕山古墳が築かれた古墳時代（3世紀中ごろ～6世紀）には、全国各地で古墳が築かれ、その総数は大小含め16万基以上とされています。その中でも、愛宕山古墳のような大規模な前方後円墳は、当時の政治の中心である「ヤマト政権」との深いつながりを示すものでした。愛宕山古墳は、河川に沿った交通の結節点を意識した立地であるといえるでしょう。

一方で愛宕山古墳ではこれまで、墳丘部分を対象とした発掘調査はなされておらず、また築造時期の手がかりとなる埴輪資料もわずかしか得られていませんでした。そこで今回、墳丘の構造を明らかにすること、埴輪などの資料から古墳が造られた時期を決定することを目的として調査区（トレンチ）を設定し、発掘調査を計画・実施しました（図2）。



図1 愛宕山古墳 墳丘の現状

（左：前方部北西コーナーから後円部方向を望む／右：後円部を南方向から望む）

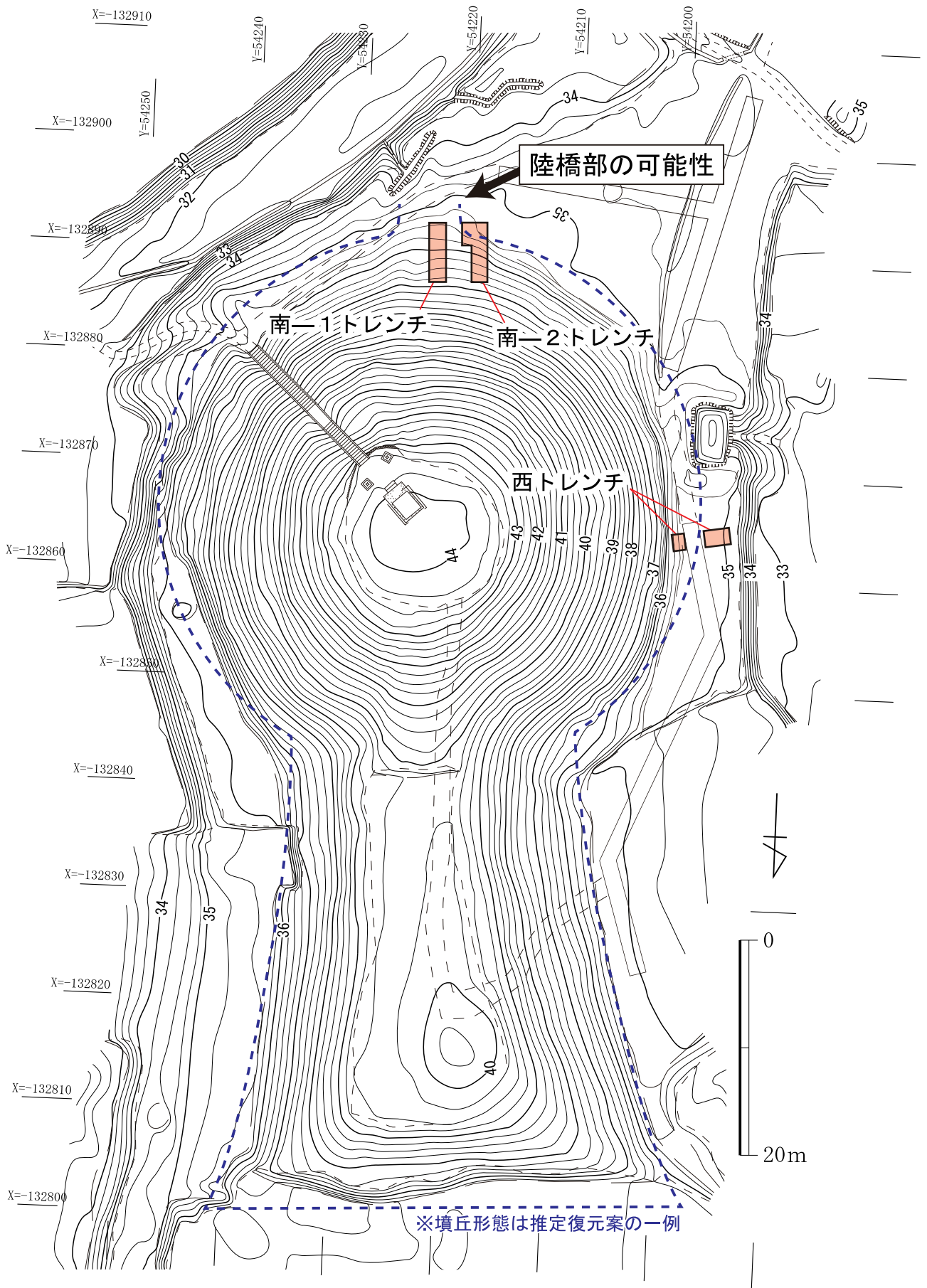


図2 墳丘測量図と今回の調査箇所
 (大阪市立大学岸本直文研究室作成の図に補筆)



図3 各トレンチの成果 (1. 南トレンチ (南より) / 2. 南-2トレンチ / 3. 南-1トレンチの石列 / 4. 西トレンチ (北より) / 5. 西トレンチの礫敷 / 6. 西トレンチの墳丘盛土)

発掘調査の成果

南トレンチの成果 (図3-1~3) 南トレンチの斜面下方 (南寄りの部分) では、元々の地山を利用して墳丘を作っている状況が確認されました。南-2トレンチでは、墳丘の斜面から平坦な面に切り替わる、墳丘の裾にあたる部分を確認できました。一方、南-1トレンチでは古墳の裾にあたる部分がなく、トレンチの南端までゆるい斜面が続いていました。また南-1トレンチの斜面上方では横一列に並ぶ石列が確認されており、この存在やトレンチ各所の状況を踏まえると、墳丘の主軸に沿うかたちで、後円部の南側に墳丘への出入口となる陸橋部りつきょうぶが存在する可能性も考えられます。

西トレンチの成果 (図3-4~6) 西トレンチは後円部の西側の端を確認する目的で設

定しました。調査の結果、およそ拳大の川原石を面的に敷き詰めた状況が検出されました。この^{れきじき}礫敷は古墳にともなう施設であると考えられますが、傾斜がゆるやかであるため、古墳の斜面そのもので

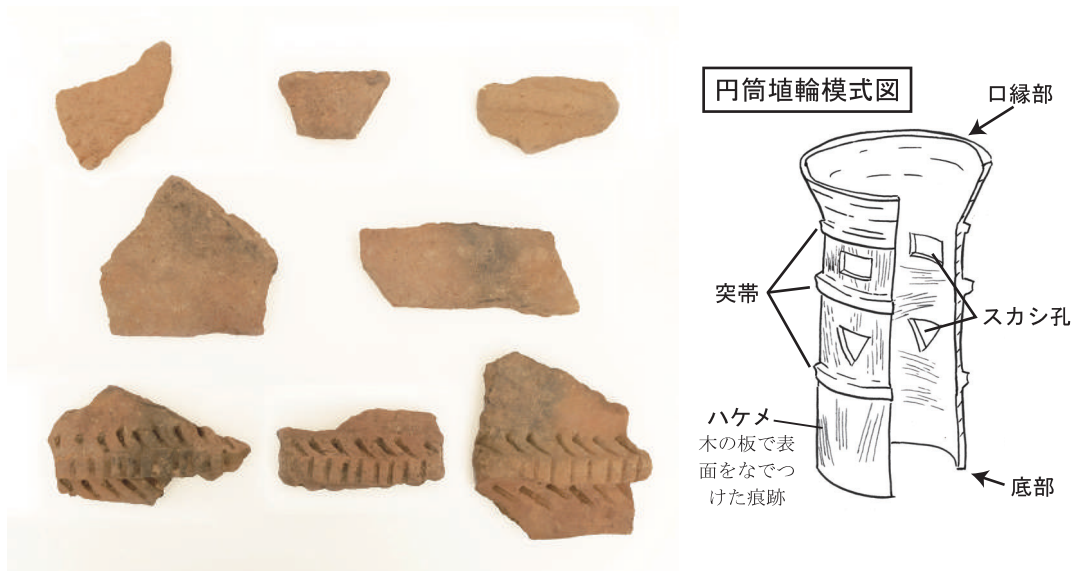


図4 今回の調査で確認された埴輪片

はなく、古墳の周囲に敷かれた石敷である可能性も考えられます。

出土した資料(図4) 今回の調査では、全体で100点をこえる埴輪の破片が確認されました。これらは古墳築造当時に、墳丘の上に立て並べられていた^{えんとうはにわ}円筒埴輪や^{あさがおがたはにわ}朝顔形埴輪(円筒埴輪の口縁部がラップ状にひらくもの)の一部です。これらの埴輪については、表面に残された製作時の痕跡などから、古墳時代前期でも中ごろ(4世紀前半ごろ)の資料であると考えられ、これまで考えられていた4世紀後半よりも築造時期が遡る可能性が出てきました。

また今回確認した資料の中には、^{とつたい}突帯やその上下に連続した刻み目を施すという、珍しい特徴を持つものが含まれています。このような埴輪は全国的に見ても珍しいもので、近くの地域でも類似した資料はみられません。愛宕山古墳と遠隔地との関係を反映している可能性があり、古墳の被葬者の性格を探る上で重要な資料といえます。

おわりに

今後は出土した埴輪の分析や、次回に向けての発掘調査計画の検討などを進め、来年も愛宕山古墳での発掘調査を予定しています。また良い成果をご報告できるよう取り組んでまいりますので、引き続きのご理解、ご協力をなにとぞよろしくお願いいたします。

最後に、今回の調査において多大なるご協力をいただいた三木市教育委員会・市史編さん室をはじめ、別所ふるさと交流館のみなさま、そして地元である下石野のみなさまに、改めてあつく御礼申し上げます。

今回の調査は、科学研究費補助金によるプロジェクト「初期ヤマト政権の地域統合原理の解明と比較考古学的手法によるその人類史的評価」ならびに『新・三木市史』考古編刊行に向けての調査プロジェクトに基づくものです。

2022年度
愛宕山古墳発掘調査の成果
2023年3月31日
編集・発行：大阪大学考古学研究室